



『城の崎にて』と草稿「いのち」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 板林, 正子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008708

『城の崎にて』と草稿「いのち」

北海道教育大学大学院教育学研究科

板林 正子

一、はじめに

本論では『城の崎にて』とその草稿である「いのち」とを比較することで、『城の崎にて』の描写の効果を明らかにしていきたい。また、作者志賀がこの作品を作るまでの変遷を辿り、作者にとつてこの作品がどのような作品なのかを明らかにしていく。

二、志賀直哉と『城の崎にて』の関係性について

『いのち』では、志賀直哉の日記や自作解説の記述から、彼と『城の崎にて』との関係について考察する。『城の崎にて』は志賀自身が体験したことを基に書かれた小説である。それは、志賀の日記の記述にも明らかである。「志賀直哉全集 第十二巻」に以下のような記述が見られる。なお※は板林による注釈である。

大正二(一九一三年)八月十五日 金

病院。かへつて、「出来事」の了ひを書き直して出来上つてひるね、伊吾(※友人の里見淳のこと)来る。起きてそれを読む。将棋をする、晩、散歩に出る。芝浦の埋立地へ行く。水泳を見、素人相撲を見物して、帰り山の手線の電車に後ろから衝突され、頭をきり背を打つた。伊吾が、

どうかかうか東京病院へ連れていつてくれた。十一時だった。

伊吾も一緒に泊つてくれたのださうだ、母とろく子が来たさうだ。ここから、志賀が実際に山の手線にひかれたということが分かる。「四、『城の崎にて』と草稿「いのち」の関係について」以降で詳しく述べるが、草稿の「いのち」の本文にも『昨年(一九一二年)の八月十五日の夜』という記述があり、これは実際の日時と一致する。また、日記には以下のような記述もされている。

十月十八日 土

起きぬげに出発、七時半の電車にのる、

沿道水害、城崎も水害かなりに烈しく町の中央を流れてゐる、川の橋大方流れてゐた。ゆどう屋といふ家を断はられて三木屋に行く、割りに気持よき所なり、湯の塩気強気は少し困る、然し、タムシにもいゝと効能書きにあつた。夜は按摩をとらせて早くねる、散々ウナサレ夕。

十月二十日 木

蜂の死と鼠の竹クシをさされて川へなげ込まれた話を書きかけてやめた。

これは長編の尾道(※「暗夜行路」のこと)に入れるつもりにした。
十月三十一日 金

つづと上の方まで歩いていった。

岩の上のやもりに石を投げたら丁度頭に当って一寸尻尾を逆立て、横這つたきりで死んで了つた、(夕方の山道の流れのワキまで)

胃悪し

此日のことは忘れた。

このことから、志賀は実際に城崎を訪れ、蜂と鼠の死についての話を書こうとしていたことが分かる。また、やもりの死についても書こうとしていたことが分かる。ただし、『城の崎にて』ではやもりではなく、蟻の死が書かれている。また、自作解説の「創作余談」には以下の記述がある。

『城の崎にて』これもありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、もりの死、皆その時数日間に実際に目撃した事だつた。そしてそれから受けた感しは素直に且つ正直に書けたつもりである。

この小説が生まれていることがわかる。しかし、実体験から生まれた作品であるとしても『城の崎にて』の「自分」と志賀は似て非なるものであり、考えが全て同じものであるわけではない。「自分」と志賀を混同すると作品の描写以外の要素が生まれかねない」と考える。

三 『城の崎にて』の成立とテキストについて

「三」では、『城の崎にて』がどのように成立したかと、テキストについて考察する。

まず、作品の成立について以下の文献を基にまとめていく。

・志賀直哉全集第二十二巻

・新潮日本文学小辞典

・日本近代文学大事典 第二巻

・増補改訂 日本文学大辞典 第三巻

・現代日本文学大事典 増訂縮刷版

大正二年八月十五日、夜、里見彈と散歩に出かけ、山の手線の電車にはねられて重症を負い、芝区愛宕下の東京病院に入院。二十七日、退院。九月二十四日、『范の犯罪』を脱稿する。十月十八日、傷の養生に城崎温泉赴く。三木屋に逗留。『暗夜行路』前篇の草稿を書きつく。十一月七日、城崎を発つ。

大正三年十月、『寓居』を書く。以後、小品二つを除いて大正六年まで創作せず。十二月十一日勘解由小路資承の娘康子と結婚。この年『城の崎にて』の草稿「いのち」執筆か。

大正四年三月、自ら進んで父の家より離籍。八月、小島風の日『山の木と大鋸』を書く。

大正五年六月七日、長女慧子出生。七月三十一日朝、腸捻転のため我孫子にて夭逝。

大正六年、園池公致と二人だけの回覧雑誌を作る。三年間の沈黙の後、創作意欲再燃。四月、『佐々木の場合』『城の崎にて』を書く。

「三」から、作品の成立には志賀が実際に城崎を訪れてから四年の歳月がかかっていることが分かる。また、大正三年十月から志賀は創作自体をやめており、創作意欲が再燃したときに最初に発表された作品が『城の崎にて』であったことが分かる。このように長い期間をかけていたということや、創作意欲が再燃して最初に発表した作品ということから、この作品に志賀は強い思い入れがあったのではないかと考える。

次に、『城の崎にて』のテキストの変遷を、寺杣雅人氏の論文『志賀直哉『城の崎にて』の形成』の形成『城の崎にて』から『城崎にて』へを基に見ていく。寺杣氏は『城の崎にて』の主要八本文として、以下のように示している。

- 1 『白樺』第八巻第五号『白樺発行所』一九一七年六月五日掲載初出本文
 - 2 『夜の光』新潮社、一九二七年一月所収本文
 - 3 『寿々』改造社、一九二九年四月所収本文
 - 4 『志賀直哉全集』第三巻(改造社、一九三八昭和十三年二月所収本文
 - 5 『映山紅』章木屋出版部、一九四〇(昭和十五年十二月)所収本文
 - 6 『映山紅』全国書房、一九四六(昭和二十一年十二月)所収本文
 - 7 『志賀直哉全集』第一巻(岩波書店、一九五五昭和三十年六月)所収本文
 - 8 『志賀直哉全集』第三巻(岩波書店、一九九九年平成十二年二月)所収本文(※抜粋が使用するテキスト)
- また、寺杣氏は本文校異を行い、八本文の違いについて述べている。以下では、1、5、6、8の違いについてまとめて述べる。

1 『白樺』

標題「城の崎にて」

段落数 10

文の総数 200

5 『映山紅』

標題「城崎にて」

段落数 6

文の総数 200

6 『映山紅』

標題「城崎にて」

段落数 11

文の総数 200

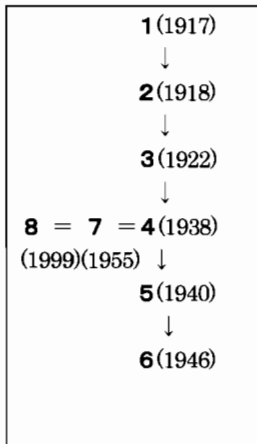
8 『志賀直哉全集』第三巻

標題「城の崎にて」

段落数 11

文の総数 201

なお、改行や文の増減箇所、語句の推移についても述べられているが割愛する。また、本文の変遷の系統図は以下になっている。



以上のことから、『城の崎にて』は何度か本文が改訂されている。また、5、6では標題も『城崎にて』と標題自体が変わっている。また4のテキストは5と6と同じ本文であるということが分かる。更に、発行されたのが一番遅いのは8であるが、改訂が一番遅いのは6である。ここでどのテキストを扱うのが問題になると思うが、今回は発行されたのが一番遅いということや、テキストを手に入れやすいということから『志賀直哉全集』第三巻(岩波書店、一九九九年平成十二年二月)所収本文をテキストとする。

四、『城の崎にて』と草稿『いのち』の関係について

こゝでは、『城の崎にて』と草稿『いのち』を読み比べ、そこから『城の崎にて』の作品の表現を考察していく。なお、『いのち』のテキストは『志賀直哉全集 補巻四』によるものとする。

まず、草稿『いのち』とは、『城の崎にて』と同様に城崎を舞台とした作品である。書かれた時期は正確ではない。しかし、冒頭部の「昨年」という記述から推測して、志賀直哉が山手線との事故に遭ったのが大正三年であることから、大正三年に書かれたものと考えられる。また、『三』『城の崎にて』の成立とテキストについてでも述べたように、志賀は大正三年十月からほとんど作品を発表していない。

次に、草稿『いのち』と『城の崎にて』の描写の違いについて以下のようにまとめよう。

・『いのち』に書かれていて、『城の崎にて』では書かれていない

①山の手線での事故について詳細に書かれている日時、怪我の状態、怪我をした時の自分の様子や考えていたこと、病院での様子

②温泉に行った時期(十月)

③自分の幸運に感謝したこと

④自分が書きたかった二つの「電車の事故」に関する話についてと、それを受けて生命に対する執着の力を考えた事

⑤精を出して入浴していたこと

⑥蜂の死に「平安」が感じられたこと

⑦「死んだ気になつて働け」という言葉について

⑧温泉寺への散歩に出た時の周りの風景(田で働いていた男や女、山の紅葉、山魚や水蟹)

⑨桑の木について(何本か桑の木が立っている、黄色い葉の中に青い葉もま

だに残っている)

⑩桑の葉の様子について(微かな風を感じて一枚の葉が動いていること)

⑪桑の木のことを「書く程もない事」としていること

⑫友人や祖母といった「自分」に関係している人間の存在が書かれていること。

・『城の崎にて』に書かれていて、『いのち』では書かれていない

①城崎という地名

②城崎に居たいと思う期間

③城崎ではよく怪我の事を考えたこと(青山の土の下で仰向けになつてたかもしれないということ、中学で習ったロードクライヴのこと、死への親しみが起ったこと)

④「范の犯罪」についての考え

⑤鼠の死についての場面

⑥蝶螈を自分が殺してしまう場面

⑦三週間居て此処を去ったこと

・『いのち』でも『城の崎にて』でも書かれているが、異なっている

①温泉が『いのち』では温泉の地名の記述がないが、『城の崎にて』では城崎温泉になっている。

②「フエータル」の表記が『いのち』では「致命」^{フエタル}、「脊椎カリエス」の表記が『いのち』では「脊ツイ、カリエス」になっている。

③自分で病院を指定したことや、フエータルな怪我かどうか聞いたことや、快活になったことについてが『いのち』では冒頭の事故の様子や場面に書かれているが、『城の崎にて』では鼠の死についての場面に書かれている。

④山女(『いのち』では「山魚」や川蟹(『いのち』では「水蟹」)についての記述が、『いのち』では桑の木の場面の部分になっているが、『城の崎にて』

では冒頭の城崎温泉で散歩中の風景描写の中に書かれている。

⑤蜂の死骸が流された期間が「いのち」では四五日あったことになっているが、『城の崎にて』では三日程になっている。

⑥桑の木が「いのち」では何本か立っていることになっているが、『城の崎にて』では書かれていない。

⑦蟻の表記が「いのち」では平仮名になっているが、『城の崎にて』では漢字になっている。

このように、「いのち」と『城の崎にて』では多くの描写が異なっている。特に主人公である「自分」の心境は二つの間で大きく異なっている。このことについて「志賀直哉の方法」の中で、下岡氏は次のように述べている。

草稿「いのち」の「自分」は、定稿の「自分」とは異なり、事故から助かった「幸運を感謝」している。(中略)しかし、草稿後半に入り、蜂の死を見た自分は次のような心境を吐露する。(中略)「死に対して今まで感じなかった静かな、親しさ」とは、草稿でこれ以前に語られてきた、助かったことへの「感謝」とはまるで異質なものである。(中略)助かったことへの「感謝」と死への「親しさ」という、全く逆の方向性を内包する「自分」の気持ちから、定稿(※)『城の崎にて』の(こ)執筆にあたって前者は捨てられ、後者のみが選ばれるに至っている。

(こ)から、「いのち」の「自分」は、助かったことに「感謝」しながら、死に対しても「親しみ」を抱いているという矛盾した感情を同時に持っていることが分かる。それに対し『城の崎にて』の「自分」は「死に対する親しみ」という感情を蜂の死を見たときまでは持っているが、感謝はしていない。しかし、その「親しみ」が鼠の死を見ると「淋しい嫌な気分になる。また、蟻の死を書いた場面では、次のように「自分」の感情を表現している。

死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる。さう思った。自分はそれ

に対し、感謝しなければ済まぬやうな気もした。然し実際喜びの感じは湧き上つては来なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極はなかつた。それ程に差はないやうな気がした。

生きてゐることに「感謝」しなければならぬ気がするとしながら、生きてゐることと死んでしまつてゐる事に、両極ではないと感じている。このような表現にしたのは、『城の崎にて』の「自分」の感情の変化に矛盾を生まず、作品全体の構成を整える目的だと考へる。

また、『城の崎にて』の作品全体を通して、「静かさ」や「淋しさ」を表す言葉が多く使われている。「いのち」では「静かさ」を表す言葉は四回、「淋しさ」を表す言葉は「心淋しい」という言葉に限定されて二回出ている。一方『城の崎にて』では、「静かさ」を表す言葉は「静寂」や「物静かさ」など言葉を変えながら、全体で一五回出てきている。また、「淋しさ」を表す言葉は八回使われ、これは「いのち」と比べてかなり増えている言葉である。このことについて、下岡氏は次のように述べている。

作品全体の与える印象が、頻出する「静かさ」「淋しさ」という用語に象徴されているとすれば、それは先に述べた「自分の死の近さを言う心境と、生死の表裏一体を言う主題に、ふさわしい作品世界のイメージ化が図られたことを示すものであろう。

実際に『城の崎にて』の中で「静かさ」を表す言葉は第一段落(※)『城崎にて』来た自分の心境を書いた場面まで、テキスト四頁一行目く五頁八行目(こ)に三回、第二段落(※)蜂の死の場面 テキスト五頁九行目く七頁六行目(こ)に七回、第三段落(※)鼠の死の場面 テキスト七頁六行目く九頁八行目(こ)に二回、第四段落(※)桑の木と蟻の死の場面 テキスト九頁九行目く一二頁二行目(こ)に三回と、後半の段落は少なくなつてゐる。更に、「静かさ」という形容詞による直接的な書かれ方ではなく、「薄暗さ」や、「自分」と蟻の死にかい関係、足の感覚や視覚がなくなるといった描写が「静かさ」

を表現している。さらに、物語の前半では「死」や「静かさ」に「親しみ」を持つている「自分」であるが、後半では死を「恐ろしい」と思う感情が描写されている。この「死」に対する「親しみ」の薄れが、「静かさ」という言葉が後半になってから数が減っている原因だと考える。

また、「淋しさ」を表す言葉は第一段落に三回、第二段落に二回、第三段落に一回、第四段落に一回と「静かさ」を表す言葉の回数に比べて、平均的に各段落に言葉が出てきている。これは、「生きて居る事と死んで了つてゐる事」と、それは両極ではなかった。それ程に差はないやうな気がした。」と感じた「自分の心境を「淋しさ」という言葉が表している」と考える。最初死に親しみを感じていた「自分」が、死を恐ろしく思い、最後には生死に差はないと感じている。これは生きていても死んでしまつても「淋しい」という点では変わりないことを、「淋しさ」という言葉を平均的に出すことで世界観を作る効果がある。

この「静かさ」と「淋しさ」という言葉を段落ごとに使う回数を工夫する「とて、いのち」と比較して読んだ時に、『城の崎にて』の方が「自分の感情の段落」この変化が説得力のあるものになっていると考える。そして「自分の感情の変化」が説得力のあるものになることで、『城の崎にて』の構成の緻密さに影響を与えている。

五、終わりに

『城の崎にて』の構成には、三匹の小動物の死による「自分の心境の変化」が大きく影響している。そして、それを支えるのが本文中に何度も繰り返される「静かさ」「淋しさ」「親しみ」といった言葉を効果的に使って、生と死を表現していることである。特に、「淋しさ」という言葉は生も死もどちらにも表現する言葉として、作品中に効果的に使っている。そして、それによつて「自分の心境の変化を細かく描写することが出来ているの

である。

引用・参考文献

- 志賀直哉『志賀直哉全集』第三卷 岩波書店 一九九九(平成十一)年二月
- 志賀直哉『志賀直哉全集』第十二卷 岩波書店 一九九九(平成十二)年二月
- 志賀直哉『志賀直哉全集』第六卷 岩波書店 一九九九(平成十二)年五月
- 志賀直哉『志賀直哉全集』第二十二卷 岩波書店 二〇〇二(平成十三)年三月
- 志賀直哉『志賀直哉全集 補巻四』岩波書店 二〇〇二(平成十四)年一月
- 下岡友加『志賀直哉の方法』笠間書院 二〇〇七(平成一九)年二月
- 寺杣雅人『志賀直哉「城の崎にて」の形成 「城の崎にて」から「城の崎にて」』尾道大学芸術文化学部紀要 二〇〇八 八九—一〇一頁
- 『現代日本文学大事典 増訂縮刷版』明治書院 一九八〇(昭和五五)年七月
- 『新潮日本文学小辞典』新潮社 一九六八(昭和四三)年一月
- 『増補改訂 日本文学大辞典 第三卷』新潮社 一九五〇(昭和二五)